

「リトライツァー」

今野和人

あらずじ

元芸人でバイト生活を送る石倉潤一（36）は元芸人で旅行代理店に勤める林正平（38）に呼び出される。石倉は林から挫折した人限定のバス旅行「リトライツアー」のMCを手伝ってくれないかと相談される。石倉は断ろうとするも、ギャラに魅入られ承服する。

当日、石倉がツツコミ、林はボケというコンビでMCをするも、うまくいかない。石倉は林の何となく楽しい雰囲気であればいいという方針に反発し、ボケ役を担って徐々に盛り上げていく。途中、参加者の高梨弦（35）がバスの中でパニック障害の症状である過呼吸を起こす。石倉は自身も同じ病気だと言って介抱し、ともにツアーを楽しもうとする。

夕飯後、参加者が挫折したあとの報われない思いを叫ぶ企画

「ザ・叫び」が行われる。酔っぱらった佐藤真奈美（30）は石倉のファンであったと告白する。真奈美は社会人になれない石倉に芸人を止めるべきじゃなかったと言い、ほかの参加者に対して、も本当の挫折の原因に向きあっていない欺瞞だと非難して、宴会場を去る。

石倉は真奈美を追いかけて海辺に行き、自分が芸人を辞めた理由を話し、真奈美の思いを受け止める。

2人はスナックで話し、真奈美は石倉に以前の芸風と違って人の話を聞ける優しい人間になったと告げる。

翌日、帰りのバスの中で参加者の青木光誠（34）と高梨が昨夜真奈美に非難された件について苦情を述べる。責められて卑下する真奈美のファンとしての在り方を石倉は肯定する。真奈美は謝罪し、林は企画の不備を反省する。重くなった雰囲気を変えるため、石倉と林は漫才をする。

石倉はバスを降りる真奈美に感謝を伝える。

10ヶ月後、石倉は人の話を聞いて受け止める臨床心理士の試験を受ける。

人物関係図

石倉 潤一 (36) 元芸人

林 正平 (38) 旅行代理店社員

佐藤真奈美 (30) 元事務社員

青木光誠 (34) 元ギタリスト

高梨弦 (35) 元俳優

佐々木舞 (28) 元柔道選手

木村大貴 (30) バス旅行参加者

高山勝悟 (45) バス旅行参加者

スナックのママ

教授 1

教授 2

1〇 坂道（朝）

を自転車でくだる石倉潤一（36）。自転車のか
ごには大きめのリュック。

2〇 桜が咲く一般道（朝）

を自転車で一生懸命漕ぐ石倉。髪の毛はボサボサで
ある。

3〇 駅・改札（朝）

石倉はICでタッチするも残高不足でドアが閉まる。
走って券売機に向かう石倉。

4〇 同・階段（朝）

を走って登る石倉。
クタクタになりながら、停車中の電車に乗り込む石
倉。

5〇 電車・車内（朝）

窓際に立つ石倉がすぐ近くにいるスーツカバーを
持った若者2人を一瞥し、窓の外に視線を移す。
雑多な人の声がして――

6〇 居酒屋・店内（石倉の回想・夜）

石倉と林正平（38）が向かいあって座っている。

ビールをもつ林の薬指には指輪がはめられている。

林「うちの旅行会社でリトライツアーっていうのをやってて」

石倉「リトライツアー？」

林「そう。要はね、挫折した人限定のバスツアー」

石倉「その、挫折した人って」

林「ミュージシャンとか役者をあきらめた人とか」

石倉「俺らみたいに引退した芸人とか？」

林「そう。そういう人に温泉で元気になってもらいたいっていう

企画」

石倉「そんなの、人来るの？」

林「それが意外に人気で今度3回目」

石倉「へー」

林「でも俺とMCをやってる奴がインフルエンザで行けなくなっ

たの。アナウンサーを挫折した奴なんだけど」

石倉「……で、その代わり？」

林「そう。石倉に俺とMCをやってもらいたいというお願い」

7〇 新宿駅・ホーム（朝）

停車した電車から飛び出てきた石倉が階段を走って

降りる。

8〇 同・構内（朝）

を走る石倉。

石倉の声「恥ずかしいし、そういうの相方のほうが向いてたから」

林の声「あいつはラーメン屋で忙しいんだって。お前が出るって
情報は出さないから」

石倉の声「MCとか向いてないし」

林の声「10年くらい芸人やったら」

石倉の声「とにかく絶対無理」

林の声「1泊2日でこれだけ出す」

9〇 林が差し出す4本指（石倉の回想）

石倉の声「やるよ」

10〇 バス乗り場（朝）

バスが行き交う。

11〇 同・待合室（朝）

林が立って待っているところに石倉がくる。

石倉「おう」

林「あぶな、来ないかと思った」

石倉「（息を整え）行きたくないという思いがあふれて、寝坊し

たよ」

林「今更なんだよ」

石倉「（割と大きな声で）100パー金のためだしなく」

林「（周りを気にして）言うなよそういうこと」

石倉「貯金するだけだからね」

林「知らないけど」

石倉「トイレ行ってくる（動こうとする）」

林「待って、忘れてた。どっちがボケでどっちがツツコミやるか
決めよう」

石倉「え？ ああどっちもボケか、昔」

林「でもあれか、俺どれくらい参加者いじっていいかわかってる
から、ボケやるよ」

石倉「じゃあいいよ俺ツツコミで（トイレ行こうとする）」

林「ちよつと（石倉にバインダー渡す）これ進行表。（離れてい
く石倉に）あと、髪変」

石倉、髪を手でさわりながらトイレに走る。

120 バスの中（朝）

参加者が左右10名ずつ静かに座っている。

入り口から石倉と林が入ってくる。

石倉「（ローテンションで）どうもー」

林「（テンション高く）おはようございます」

石倉「今回司会を担当する元芸人の石倉と」

林「林です。よろしく願いまーす」

参加者たちがパラパラと拍手する。

林「全く力のない拍手、ありがとうございます」

石倉「（参加者が笑わないのを見て）あれだよ、挫折して力ない
んだよ」

林「いや、そうじゃないでしょ」

参加者は静かに2人を見ている。

林「まあ、2日間楽しくやっていきましょう」

石倉「えー（進行表見て）、まずは点呼をとりますね」

林「名前を呼ばれたら、小さく声で返事してください」

石倉「聞こえないでしょ（参加者が笑わないを見て）。挫折して

声出ないかもしれないけど」

林「あんま挫折挫折言わないで」

参加者、水を打ったような静けさ。

林「ま、あの、点呼とるのでふつうに返事してください」

石倉「えー、じゃあ挫折した杉山さん」

林「だから言うなよ」

空調の音に続き、バスが発車する音。

130 都内を走行するバス・外観（朝）

140 同・一番前の席（朝）

石倉と林が並んで座っている。

石倉「いやー、重いな」

林「お前のせいだよ」

石倉「ボケがつまんないからでしょ」

林「いや、挫折挫折言うからでしょ」

石倉「それを笑っていこうという趣旨でしょ」

林「徐々にね。え、そんなやる気あった？」

石倉「ないけど、笑いないのはきついでしょ」

林「なんとなく楽しく楽しい雰囲気いいんだよ」

石倉「楽しくないのにな？」

林「とにかく平和にやろう、ね。今からニックネームつけるから、ふつうのツッコミだけ言って（立ち上がる）」

石倉も立ち上がる。

林「みなさーん。これからお互い親交を深めるためニックネームをつけたいと思います。じゃあ、まず手前の」

石倉「あ、まずは僕らからつけましょうか」

林「え？」

石倉「一方的に決められてもね」

林「まあまあ、そうしますか。じゃああなた普段なんて呼ばれてます？」

石倉「名前呼んでくれる人いないな」

林「暗いな。友達とかには」

石倉「友達いないな」

林「ますます暗いな」

参加者の高山（45）がふつと笑う。

林「じゃあ暗い石倉なんで暗石さんでどうです？」

石倉「うわ、ひどい、ださい、つまんない大学生みたい」

高山が少し笑う。

林「じゃあ何がいいの？」

石倉「……イッシーとか」

林「むちゃくちゃつまんない大学生じゃん、暗いくせに」

参加者数名が笑う。

石倉「イッシーです、よろしく」

林「じゃあイッシー。俺はなんて呼ぶ？」

石倉「林だからね、リンリン」

林「リンリンとイッシーってださすぎない？」

参加者、まずまず笑う。

高山「リンリン！」

林「はい、じゃあリンリンでいきましょう。（石倉に耳打ちす

る）お前ボケやって」

石倉「ああ」

林「（進行表石倉からもらう）じゃあみなさんのを決めていきましようか。手前の席の青木さん」

青木光誠（32）「はい」

林「青木さんはカッコいい、元ギタリストなんですね」

青木「一応」

石倉「ベースのほうが似合いますよ」

林「今更言うなよ」

青木「よく言われてました」

石倉「じゃあベース顔さんで」

林「じゃあじゃないだろ」

石倉「……でもあれか、見た目で決めるのはねえ」

林「ちよつとねえ」

石倉「じゃあ、アルペジオさん」

林「なんで」

石倉「唯一知ってるギター用語」

青木「ベース顔よりいいですけど」

林「いいですか？ じゃあアルペジオさんです、拍手」

一同、拍手する。

林「続いてお隣の佐々木さんは、お、柔道選手だったんですね」

佐々木舞（28）「大した成績じゃなくて」

林「それでもね。惜しくもヒザのケガで引退されたとありますけ

ど、それは残念でしたね」

石倉「逆に何か好きなケガってあります？」

林「ないだろ」

石倉「軽めのか」

佐々木「……手のまめとか、懐かしいですね」

石倉「じゃあ手まめさんで」

林「恥ずかしいよ」

まずまず笑いが起きる。

佐々木「了解です」

林「いいの？ じゃ、手まめさんに拍手」

一同、拍手する。

× × ×

参加者たちが隣の席の人と話している。

150 同・最前列の席(朝)

並んで座る石倉と林。

石倉「安直なネーミングだったな」

林「十分十分」

石倉、不服そうな顔で外を見る。

林「真面目だねー」

石倉「……」

林「あれだな、大会で決勝出ただけあるというか、芸人だったんだな」

石倉「三流三流。結果出すことしか考えてなかったから」

林「しか？」

石倉「売れる人は大会とか、むしろ出たあとのこと考えるらしいよ」

林「出られるだけすごいでしょ。俺らなんにもなかったから」

石倉「その後就職したろ。俺辞めて3年、ずっとバイトだぞ」

林「いくつだっけ？」

石倉「36」

林「早く辞めてよかったよ」

石倉、外を見る。

160 高速道路を走るバス

170 アウトレット・外観

に停車するバス。

180 同・中

ショッピングを楽しむ人々。

190 同・自動販売機前

石倉が缶コーヒーを飲んでいると佐藤真奈美（30）
がくる。

真奈美「あ、どうも（石倉と目を合わせず話す）」

石倉「あ、週5無理さんですね」

真奈美「あ、覚えてくれたんですね」

石倉「自分も週5働くの無理なんで」

真奈美「でも、この仕事は」

石倉「ああ、この仕事、代理なんです」

真奈美「え……じゃあその、普段は」

石倉「え？」

真奈美「普段は、何の仕事を」

石倉「（そこまで聞くかといった感じで）え、まあ、バイト、病

院の宿直の」

真奈美「ああ」

石倉「なにか」

真奈美「いえ……あの、みなさん夢を目指してたのに、わたしは
正社員でつぶれたってだけで、しょーもないというか」

石倉「いやいや、立派な挫折じゃないですか」

真奈美「そうですか？ でも」

石倉「なんか目指してた人は、自分をよくわかってなかっただけ

ですよ。あ、ケガの人は別ですけど」

真奈美「わかってなかったんですか？」

石倉「わかってなかったですね。人生無駄にしました」

真奈美「でもその、活動してる間、ファンの人は楽しんでたんじやないかなーと」

石倉「ファン少なかったんですよー。ろくな辞め方しなかったし、うーん」

真奈美「……すみません、しゃべりすぎて」

石倉「いえ、全然」

真奈美、離れていく。

林の声がして石倉は目を向けると、林と佐々木が親し気に話している。

200 高速を走るバス

210 同・前の席

石倉、指輪をしていない林の手を見る。

石倉「何話してたの、手まめさんと」

林「いろいろよ、人生とか？」

石倉「お前子どもいるんだろ」

林「おい、声大きい」

石倉「変わらないな」

木村大貴（28）の声「すみませーん」

林と石倉、振り返る。

木村「アメンボさん体調悪そうです」

林と石倉が立ち上がり後方まで歩く。

高梨弦（35）がワイシャツの上のボタンを外し、

過呼吸状態。

木村「さつき葉は飲んでたんですけど」

林「どうしよう、ツアーナースいないんですよね」

石倉「(木村に)隣代わってもらっていいですか」

石倉、木村と席を代わる。

石倉「(高梨に)あ、僕も同じ病気です。背中さすっていいですか」

高梨、うなづく。

石倉「なんかね、あるんですよ。こういうときの対処が(片手でスマホ出す)ブックマークしてるんですけど、忘れちゃうんですよねー」

高梨「……」

石倉「ありました。じゃ、一回息止めて5秒我慢して大きくはいてみましょうか。一緒にやりましょう。はい止める……(息を大きくはく)」

石倉と高梨が呼吸を繰り返すのを真奈美が見ている。

220 ガラス工房・工場

職人がガラスに息を吹き込み、大きくする。

参加者が拍手する。

230 同・展示室

石倉がガラス細工を見ている。高梨は近くの席に座っている。

石倉「見てください、どこにでもありそうな美しさですよ」

高梨「……最近はパニックならないんで、一泊くらいと思ってたんですけど」

石倉「ふいにあいつは来るから困りますよね」

高梨「ええ……病気になるのに来るべきじゃ」

石倉「いやあ、パニック障害って完治とか難しいし治るの待ってたら死んじゃうかもしれないし」

高梨「それはちよつと極端ですけど」

石倉「僕、極端なんですよ」

高梨「……自分はその、悪化して役者も引退して」

石倉「ああ。僕は舞台は平気でしたけど、満員電車は今も苦手ですね」

高梨「じゃ、引退の理由は別ですか？」

石倉「自分はまだ……限界に気づいたとか、そんな感じですよ」

高梨「気づきますよね、あるとき」

石倉「割と、意外なほどがくつとききましたね」

高梨「でも楽しいですよ、リンリンさんのコンビ」

石倉「辞めたやつが何やってんだみたいな感じですけど」

高梨「そんなことないですよ。2人のかけあいとかニックネームとか、笑いました」

石倉「……じゃまあ、僕も得意ではないんですけど、どうせなら一緒に楽しんでみませんか？ あいつのことは忘れて。また来る約束なんかしてない訳だし」

高梨、うなづく。

240 バスの車内

ビンゴカードをもつ参加者たち。

テレビのモニターに「3」と出る。

佐々木「ビンゴ！」

林「早い！ おめでとうございます」

石倉「（ビニール袋を佐々木に渡し）ものすごい安いお菓子です」

林「確かに安いけど」

和やかに笑う車内。

250 走り湯・外観

260 同・横穴式の源泉

270 同・足湯

林が足を入れる。

林「熱い！（湯から足を抜く）」

石倉「大げさな。言ってもそんな熱くはないでしょ（リアクションをやり慣れてない様子で湯につけた足を出す）熱！」

林「だから言ったじゃない」

一同、和やかに笑う。

石倉「あれ？ アメンボさん、疑ってませんか？ 大げさだろうと」

高梨「……いやいや、そんな熱くないでしょ」

林「お！」

高梨「（足を入れる）え、熱くないですよ」

石倉「我慢してませんか？」

高梨「全然」

林「すかさずなあ」

ほかの参加者が足を入れると口々に「熱い！」と言いながら、足を湯にひたしていく。

280 熱海城・外観

一同が見上げている。

290 同・天守閣

熱海が一望できる景色。

林と石倉がスマホで参加者を撮影している。

高梨「(石倉に) 写真、一緒にとつてもらえませんか？」

石倉「もちろんもちろん」

高梨が石倉といっしょに自撮りしているのを見る真奈美。

300 温泉宿・外観(夕)

バスが減速しながら入っていく。

310 同・フロア→大浴場(夕)

浴衣姿の参加者たちが大浴場ののれんをくぐっていく。

320 同・男子湯(夕)

思い思い浸かっている参加者たち。

林も浸かりながら参加者と話している。

330 同・露天風呂(夕)

月がよく見える。

一人、奥に浸かって見上げている石倉。

木村が近づいてくる。

木村「お疲れさまです」

石倉「あ、お疲れさまです」

木村「一日楽しかったです」

石倉「こちらこそ」

木村「……あのく、大学って、行ってました？」

石倉「一応」

木村「いいなー。自分は次なにやるか決まってる。大学も行ってないんで選択肢少ないし」

石倉「あくでもあれですよ、この仕事代理で、普段はバイトです

よ

木村「あ、そうなんですネ……なにか次やりたいことって」

石倉「全く。というか次とかあんのかな(笑う)」

木村「今回のMCとかあってるんじゃ」

石倉「いやー、今回だけですネ」

木村「あんまりこういうのは」

石倉「あ、嫌じゃないんですけど、やっぱ辞めても芸人っぽいことやるの恥ずかしいっていうかね」

木村「でもリンリンさんは」

石倉「あいつは恥じらないんで。僕はあと、会社の人間関係とか難しいんですよ。まあ年齢的にも就職とか無理でしょ」

露天風呂のそばで咲いている椿が1つ落ちる。

340 同・部屋(夜)

石倉がお茶を湯飲みに入れている。林はスマホをいじってにやついている。

石倉「……手まめさんと交換したろ？」

林「お、わかる？」

石倉「真面目に仕事しろよ」

林「不倫ってさあ、マルチバースの扉だよな」

石倉「意味はき違えてるよ」

石倉、お茶を飲みつつ進行表をみる。

食事のあと、「ザ・叫び」とある。

350 同・宴会場(夜)

浴衣姿の参加者たちが食事をしている。

お酒をつぎあう参加者たち。

前方に座る林と石倉が顔を見合わせ、立ち上がる。

林「(マイクをもち) えーみなさま、そろそろ『ザ・叫び』という名物コーナーに移りたいと思います！」

一同拍手する。

林「この場にはいろんなことでつまずいた方がいらっしやいます。

今抱えてる思い、吐き出したい思いを叫んでスッキリしよう

じゃないかと、そういう企画なんですネ」

石倉「なるほど。我々の指名で選ぶんですか？」

林「いや、強制はよくないんで挙手制でいきましょう」

石倉「じゃあアルペジオさん」

林「言ったそばから。挙手で」

青木「はい、じゃあ(挙手する)」

林「お、いいんですか」

青木「いきます（立ち上がってスタンドマイクに向かう）」

林「みなさん拍手」

一同拍手する。

マイクの前で緊張する青木。

林「一言でも、蕩々と語ってもOKです。では、お願いします」

青木「……バンド解散しても、ギター辞めたくなくて、ずるずる続けて。でも華がないって言われて、どのバンドにも加入できなくて……いや、いいでしょ上手ければ。ベース顔って言うなよ！」

石倉、はつとして頭をさげる。

林「ごめんなさい。嫌だったんですね」

青木「正直」

石倉「申し訳ありませんでした」

青木「アルペジオにしてくれたんであれですけど」

石倉「いや、一回でもよくなかったです」

青木「でも、イッシーさんに対してというよりか、昔そういう風に言ってきた人に叫びたかったというか」

林「なるほど。どうでしょう、叫んで少しはすっきりできましたか」

青木「はい」

林「いい笑顔が見れました、拍手」

一同、拍手する。

林「ではほか、どうでしょう」

高梨、挙手する。

林「おお、アメンボさん、お願いします」

高梨、スタンドマイクの前に向かう。一同拍手。

高梨「えー、まず今日バスの中ですいませんでした」

林「全然いいですよ」

高梨「今日思いました。パニックに負けたくない。パニックで役者を辞めて以来逃げ回ってたんですけど、もうびくびくしたくない。今日、楽しく過ごせたおかげで、そういう気持ちになってきました。ありがとうございます」

一同、拍手。

林「いいですね」

石倉「僕のおかげですよ」

林「自分で言うなよ。ほかどうでしょう」

真奈美「（手あげて）はい、はい」

林「お、盛り上がってきました。どうぞ」

真奈美立ち上がるが酔っぱらっており足取りが危うい。

林「ちよつと、大丈夫ですか？」

真奈美、頭の上で丸をつくり、所定の位置に着く。

林「では週5無理さん、どうぞ」

真奈美「あ、まずお2人の名前、イッシーとリンリン？ 卑怯だ

と思うんですよ」

林「卑怯？」

真奈美「私たち、辞めた仕事とかのじゃないですか、なのに自分

たちだけはしょもない名前で」

一同、笑う。

林「たしかにそうですね」

真奈美「それっていうのも、イッシーさん（失笑）、石倉さんが内面を見せたがらない人なんですよ。だから人はいじるのに、自分はいじらせない」

林「あ、そういうところある」

真奈美「そのくせ、昔と違って、足湯で熱！ とかやるんですよ。

あれ、すんごい覚めました」

林「え、知り合い？」

石倉「いや」

真奈美「……わたし、ファンだったんですよ。石倉さんのコンビ、トブユメの」

石倉「え？」

一同、どよめく。

真奈美「今日バス乗ってきたときびつくりして。来るなんて全然知らないし」

林「え？ ていうかほんとにファン？」

真奈美「当時のツイッターネーム、ななです」

石倉「（納得する感じ）あゝ」

真奈美「石倉さん、今よりずっと怖くて、当時声かけるとか無理でした」

林「なるほど。でもすごい再会（拍手する）」

一同、拍手する。石倉は気まずそう。

林「で、叫びたいのは、つまりファンだったということ？」

真奈美「いや、一番いいのはその、石倉さん、何芸人辞めてんだよ！ ってことです」

石倉「……」

林「（石倉を見て）まあね、ファンは残念でしょうけど、こればっかりはね」

真奈美「林さんはいんですよ、こうやって就職できたから。石倉さんは社会人になれないんですよ、芸人しかなかったんですよ、売れなくても」

石倉「あれかな、僕にいいことなんで個人的に話しましょうか」

林「あ、その方がいいかもね」

真奈美「じゃあじゃあ、全員にいいことありますよ」

林「え？」

真奈美「さつきから嘘くさいんですよ。挫折したのに、本当の理由に向き合っていないでしょ」

林「（参加者の反応を見て）ちょっと待ってください」

真奈美「（青木に）顔でも周りのせいでもないでしょ。単にそこまで上手くも魅力もなかったんじゃないですか」

青木「……」

林「週5さんやめましょう（真奈美に近づいていく）」

真奈美「パニック障害も大変なんだろうけど、落ち着いたらまたやればいいじゃないですか。ずっと辞めるきっかけ探してたんですよ」

高梨「……」

林が真奈美のマイクを奪う。

真奈美「（地声で）認めてよ、負けた自分が自分でしょ」

一同、殺伐とした空気になる。

真奈美は走って宴会場を出て行く。

石倉は真奈美を追いかける。

360 サンビーチ（夜）

真奈美がふらつきながら歩き、倒れそうになるところを石倉が介抱する。

真奈美「さわらないでください」

石倉、手を離す。

真奈美「そんな、イケメンみたいなこと嫌ってたじゃないですか」

石倉「たしかに」

真奈美「……わたしみんなに嫌われましたね」

石倉「まあ、そうでしょうね」

真奈美「卑怯ですよ。石倉さんこそ、ああいう身も蓋もないこと言う人だったじゃないですか」

石倉「ですね」

真奈美「卑怯ですよ」

石倉「でも、種明かしじゃないですけど」

真奈美「え？」

石倉「舞台上だからいいんですよ。芸人同士だから、身も蓋もないこと言い合って、見せ物にできるんです」

真奈美「そっか」

石倉「今日のみんなも内心わかって、酔って、優しい嘘をつきあつてるといふかね」

真奈美「それがたまらないんです」

石倉「そういう人がお笑いライブ行くんですよ」

真奈美「……解散してから行かなくなって……休日、どこも行くところがないんです」

石倉「……」

波の音。

370 同・波打ち際（夜）

を歩く石倉と真奈美。

石倉「最後の半年、ネタの方向性変えたじゃないですか。相方は結婚したから売れたかったんです」

真奈美「ええ」

石倉「でもそれで、ネタづくりが楽しくなくなったんですよ。」

そしたら体調も悪くなって」

真奈美「元に戻すことはできなかったんですか」

石倉「そしたら売れないと思ってたし……でも本当はアメンボさ

んに言ってたみたい、辞めるきっかけ探してたんですよ。方向性変えたら失敗したって物語にしてるだけで、本当は一生やっていく自信がなかったんです」

真奈美「でも、そんなに自信ある人少なくないですか？」

石倉「どうだろ」

真奈美「……ファンがそういうの与えるのって、難しいですかね」

石倉「もらったのは多分、自信より感謝ですね」

真奈美「（立ちどまり、嫌そうに）え？」

石倉「感謝を覚えて少し人間になったというか」

真奈美「ヤンキーじゃないんだから」

石倉「（振り返り）え？」

石倉「石倉さんに人間性なんて期待してないですよ」

石倉「あー」

真奈美「続けてれば、いつか、なんかのきっかけで」

石倉「はじめたとき、人生捨てる気でしたけどね……怖くなったんです」

真奈美「……」

石倉「失望したでしょ」

真奈美「（海を見て）なんとなくはわかるんです、ずっと見ていると」

石倉「（真奈美に並び）……」

真奈美「でも、辞めてしまったの、ずっと悔しかったです」

石倉「すみません」

真奈美「面白いんだぞ、世間がバカだから気づいてないだけで、めっちゃくちゃ面白いんだぞって思ってた」

石倉「……」

真奈美「（石倉を見て）それに、辞めるとき、舞台上で言ってほしかったです。ホームページで発表って、直接殺してください」

「よ」

石倉「ああ……」

真奈美「無様な姿を見せてちゃんと幻滅させてほしかった。いたたまれない空気なつても、別れつてそういうものでしょ」

石倉「……」

真奈美「世界から追いかけてた人が急に消えちゃったんです。そのあと、何に向かっていけばいいかわかんなくて……」

石倉、耐えかねたように海に数歩ずぼずぼ入って
いく。

石倉「だめだなくほんと」

真奈美、石倉の行動を懐かしげに見る。

真奈美「あくまで、私の意見ですけど」

石倉「（振り返り）すみません」

真奈美「……石倉さんはファンに何か期待してました？」

石倉「まー、なさそうに見えるでしょうけど」

真奈美「ええ」

石倉「あれかな、テレビに出るため強いネタが求められるんですけど。そうじゃない一回しかやらないような、微妙なネタを喜んでくれるのはうれしいですね」

真奈美「なるほど……」

海からあがる石倉。

佐藤「最近、何してるんですか？」

石倉「バイトだけで何も。佐藤さんは？」

真奈美「スナックに通うようになりました。それで悪い飲み癖が」

石倉「へー、スナック」

真奈美「はい」

石倉「……戻りづらいし、行ってみますか」

真奈美「え」

380 熱海の繁華街（夜）

を歩く石倉と真奈美。

おしやれなスナックを見て、首を振る真奈美。

× × ×

石倉と真奈美が散策していると、林と佐々木の姿を見る。追いかける石倉と真奈美。

ラブホテルに入ろうと引つ張る林を佐々木が背負い投げする。小さく拍手する石倉と真奈美。

× × ×

「うさぎ小屋」と書かれたスナックを見る石倉と真奈美。

390 スナック「うさぎ小屋」・カウンター

カウンターしかない狭い店内。奥に仏頂面のママがいる。

酒を飲みながら話している石倉と真奈美。

真奈美「でも、やりたいことに挑戦したんだからよかったんですよ。わたしなんか何もないですよ」

石倉「でも、僕らみたいな売れない芸人の良さを見つけてくれたじゃないですか。一年目のときからツイッターでほめてくれましたよ」

真奈美「まあ」

石倉「その感性持つてる人はまた誰か見つかりますよ」

真奈美「……石倉さんって人の話聞ける人だったんですね」

石倉「いや、まあ、昔は聞かなかったですね。愚痴とか嫌いで」

真奈美「ああ」

石倉「でもまあ思い通りいかないとわかって、しょうがない、聞くかみたいな」

真奈美「バスの中でアメンボさんあれしてたし、あれ？ 優しくなっただけですね」

石倉「まあ、熱！ とかやるし、つまらなくもなりましたけど」

真奈美「あれ似合わなかったですね」

石倉「ねえ」

真奈美「でもよかったですよ。ちよつとつまらなくなっただけでも？ 代わりにその、優しくなっただけなら」

石倉「いいこと言うな」

石倉、目の前のお酒を飲む。

石倉「なんというか、少し自信になりました」

真奈美「……昔も直接言えばよかったな」

佐藤、目の前のお酒を飲むとグラスが空になる。

真奈美「ただ聞いてもらうだけでいいんですけど」

石倉「はい」

真奈美「わたし兄がいて、10代のころ胸とか触られてたんですよ。でも親に言っても知らん知らんって態度で。そういうとき、たまたまテレビでネタ番組見て、お笑い好きになっただけです。あの、何も言わないでください」

石倉「……」

真奈美「写真、撮ってもらえませんか？」

石倉「え？」

真奈美「(スマホ出して) その、2人で」

石倉「ああ、いいですけど」

ママ「写真？ わたし撮る？」

真奈美「あ、お願いします」

400 同・店の外(夜)

ドアの前で並んで立つ石倉と真奈美。

ママ「はい、もっと近寄って。ピースピース」

石倉と真奈美、ピースする。

ママ「はい、チーズ」

ママが石倉と真奈美を撮影する。

410 ホテル・部屋(夜)

林が寝転がっているところに石倉が入ってくる。

林「お(嗅ぐ)、香水の匂いがするね」

石倉「ああ、スナックのママだ」

林「いやいや、お楽しみでしたね」

石倉「一杯飲んできただけ」

林「こっちは大変だったんだから。とんでもない空気。とにかく

飲ましてさ」

石倉「ああ、そっか」

林「で、聞いてよ。気分変えようと外出てさ」

石倉「背中大丈夫？」

林「え？」

石倉「風呂入ってくる」

林「……痛いよ」

410 大浴場(夜)

石倉が考え事をしている顔をしながら湯につかって

いる。

高梨が露天風呂から中に入ってくる。

お互いチラッと見て、会釈して高梨は出て行く。

石倉は顔に湯をかける。

420 伊豆山神社・外観（翌日・朝）

430 同・境内（朝）

参拝を終えた石倉を階段下で待つ真奈美。

真奈美「何お祈りしました？」

石倉「もう年なんで、健康です」

真奈美「わたしも石倉さんの健康を祈りました」

石倉「いやいや、自分のは？」

真奈美「いいんです。私特にやりたいことないし」

石倉「僕もないですよ」

石倉と真奈美を見る青木。

440 高速を走るバス

450 バスの車内

話し声が少ない静かな車内。

青木「あの〜」

林「はい（後ろを振り返る）どうしました」

青木「なんか、つまらないんですけど」

林「あく、じゃゲームとか」

青木「そういうのはもういいっていうか」

林「ああ、じゃあ」

青木「昨日の夜以来、モヤモヤして」

林「え？」

青木「1人で現実に向き合うのしんどいから来たのに、急に刺さ
れて」

石倉も振り返る。

真奈美が身を固くする。

青木「刺したほうだけすつきりして、ファンの人とも仲良くして、
おかしくないですか」

真奈美立ち上がる。

真奈美「あの、すみませんでした（頭を下げる）。みなさん全員
に謝ります」

林「週5さんも酔ってたんですよね」

青木「酔って本音出たんですよ。自分のことは棚に上げて」

真奈美「本当に申し訳ありません」

青木「僕は何もなくても一応自分で目指したんです。あなたは人
に夢を託してただけでしょ」

真奈美「はい」

石倉「夢なんかなくてもいいじゃないですか」

青木「なくてもいいけど」

石倉「なんとなくミュージシャンになる人もいるし」

青木「そうじゃなくて、なにもしてない人に裁かれたのが悔しい
んですよ」

真奈美「そうです、そう思います。わたしは空っぽで、何もして
ないんです。空っぽのくせに人のこと」

石倉「人を応援するって空っぽじゃないでしょ、むしろあふれて
るでしょ」

青木「ずいぶんファン思いなんですわね」

石倉「自分でも意外です」

青木「……週5さんが言ったこと、それは多分その通りです。でもそれを、自分のギター聞いたこともない人に言われるの、ものすごく嫌です」

真奈美「はい。勝手なことと言ってすみませんでした」

一同、沈黙する。

高梨「（立ち上がり）あの、ケガで再起不能とは違うし、パニックを言い訳に引退したところはあるんだろうけど」

真奈美「いえ」

高梨「それでもガンときて。死ぬって、もうやれないって思っただんです。ネットの情報とか読むのと違って、そもそもなる人がみんな違うわけだし」

真奈美「はい」

高梨「で、まだまだ役者だったころ思い出すし、夢見て変な時間に起きるし、あのときああしてたらとか今も思うから、それをすっきりやめたかったんだろうと言われるとちよつと……」

真奈美「あの、本当にすみませんでした。うらやましかったんです多分。本気で挑戦してきた人が。嫉妬なんです」

高梨「まあ、いいんです。私も週5さんのこと、会社辞めただけって思ってたし。でも、ファンでいられなくなつて、働くの辛くなつていったのかなとか」

石倉「……」

林「すいません。この企画はじめて、いろんな段階の人がいると知ったんですけど、現状観光がメインで……要はその、いろんな生き方、第二第三の人生があつていいと認め合えるようなプラン、今後そういうのにしたいと思いますので、今回は力不足ですみませんでした」

石倉「なんかすごいきれいごとだったけど、今のまとめ？」

林「まあ、そう」

一同、沈黙。

石倉「青木さんからつまらないと要望が出たし……漫才でもやり
ますか」

林「そういうんじゃないでしょ」

真奈美「お願いします！ ちょっとあの、空気変えてほしいとい
うか」

林「ずるいよ、もとは週5さんのせいでしょ」

青木「僕からもお願いします」

林「え〜」

石倉「イッシーリンリンです、お願いします」

林「勝手に始めるなよ」

一同、拍手する。

高山「リンリン、がんばれ！」

林「はい、もうやります」

石倉「今回ね、このMC、僕ピンチヒッターなんですよ。ある日

呼び出されてね」

林「まあそうなんですよ。このMCを担当している奴がインフル
エンザなったんで、代理を頼もうかと」

石倉「（コントに入る演技）俺MC得意じゃないし」

林「（コントに入る演技）10年くらい芸人やったろ」

石倉「他あたってよ」

林「ほかいないんだって、頼む」

石倉「絶対やらない」

林「1泊2日でこれだけ出す」

石倉「やらせてください！」

林「態度変わりすぎ！」

真奈美「（薄く笑い小声で）ベタだな〜」

石倉「で、まあ行くことになったんですけど」

林「最初バス入ったときお前ひどかったよな」

石倉「そう？」

林「やってみ」

石倉「どうも今回MCを担当する石倉と」

林「林です、お願いします。あー、力のない拍手ありがとうございます
います」

石倉「挫折して力がないんだよ」

林「いや、そうじゃないでしょ」

石倉「え？　じゃあ点呼をとりますので呼ばれたら」

林「小さな声で返事してください」

石倉「いや、挫折して声出ないかもしれないけど」

林「あんま挫折っていわないで」

青木がふつと笑う。

石倉「それでは挫折した杉山さん」

林「だから言うなよ！」

高梨の笑顔。

石倉「あのときみなさんひどかったですよ」

林「ひどいのはお前だよ」

漫才を続ける石倉と林とそれを見る参加者。

460 バス停車場

石倉と林がバスの出口に立ち、下りてくる参加者
に「お疲れさまでした」と声をかける。

高梨が下りてきて、

石倉「お疲れさまでした」

高梨「楽しかったです」

石倉 「ありがとうございます」

高梨 「……バス降りても、あいつを待たず人生楽しもうと思いま
す」

石倉 「僕もそうします」

高梨 「お元気で（頭を下げて去っていく）」

数名の参加者が降りたあと、青木が降りてきて、

石倉 「お疲れ様でした、いろいろ失礼しました」

青木 「今、佐藤さんに謝りました」

石倉 「昨日の佐藤さんはひどかったんで、言ってやってよかった
んですよ」

青木 「え、どっちの味方ですか」

石倉 「今は青木さんですよ」

青木 「……自分ではそんな悪くないと思うし、辞めてもギター弾
いていいんですよ」

石倉 「もちろんです。僕はもうネタやらないですけど」

青木 「ドライですね。でもさっきは汗かいてて、なんかよかった
です」

石倉 「いえ、ありがとうございました」

青木、頭を下げて去る。

林 「じゃあ俺、気を利かせるわ」

石倉 「それ言わなくていいよ」

林が離れ、真奈美が下りてくる。

石倉 「お疲れさまでした」

真奈美 「漫才までしてもらって」

石倉 「途中から全然ウケなかったですね、何も浮かばなくて」

真奈美 「もともとコントですもんね」

石倉 「一応」

真奈美 「あの、単独ライブ『頭の中の蠅』全公演見に行きました」

石倉「えー、うれしい」

真奈美「再開発の立ち退きに抵抗するアダルトショップのネタ、

面白かったです」

石倉「おお、ありがとうございます」

真奈美「一回しかやってないネタだと、ピースボードで世界一周

した新入社員が期待の新人ぶるネタが好きでした」

石倉「あく、ありましたねそんなの」

真奈美「最高です。トブユメが好きで、もっとお笑いが好きにな

りました」

石倉「うれしいです」

真奈美「ほんとに今までお疲れさまでした」

石倉「こちらこそ、今まで応援ありがとうございます」

お互い頭を下げ、真奈美は去っていく。

470 図書館・外観（数日後）

480 同・席

石倉が本を何冊も積み上げ、勉強している。

490 大学・外観

S 「10ヶ月後」

500 同・教室

教授が2人横に並んで座っている向かい側に石倉
がイスに座っている。

教授1 「では、なぜ臨床心理士になろうと思ったのですか？」

石倉が口を開く。

510 新宿西口・雑踏

観客の笑い声。

520 ライブハウス・中

舞台上で芸人がネタをやっている。

客席の最後尾で真奈美が見ている。

石倉の声 「昔、芸人をやっていたころは自分が思うこと、言うこと
とで人を笑わしたいと思ってたんですけど」

530 電車の中

座っている真奈美がスマホの写真ファイルを開き、

石倉と真奈美で撮影した写真を選び拡大する。2

人のぎこちない笑顔。

石倉の声 「挫折した経験から、今は人の話を聞くことで、（照れ
ながら）まあ、少しずつ笑えるようになる手伝いができれば
いいなと思うようになったからです……きれいごとを言う」と

（了）